



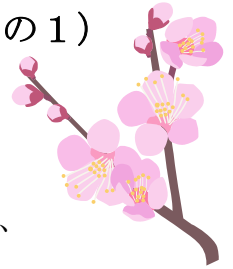
# 『私の忘れもの』

第31号

H22.2.18

## ☆ 認知症を発症した方への関わり方・・・徘徊への関わり方（その1）

徘徊をする方への関わり方は、その原因によって異なってきますが、共通して言えることは、徘徊をしているご本人は、そのことを自覚できていないということを、周囲の人達がしっかりと理解することです。関わり方が穏やかでご本人が安心できるものであれば、時間はかかっても、徘徊が少なくなったり、しなくなることもあるといわれています。



**迷子になる：**道を間違えたり、一緒に出かけた相手を見失う。こうした時には、○衣服に名前と連絡先を縫い付ける（襟首の裏側・前開きの見返り等） ○お守りの中に名札を入れる ○ネックレス等を常用している方へは、ペンダントヘッドの裏に連絡先を掘り込む ○徘徊探知機器を、服の内側にしっかりとした蓋つきポケットに入れて持たせる ○近所の交番などと連絡を持つ ○ご近所に認知症であることへの理解や協力を求めておく。などいくつかあげることが出来ます。

ご本人が見つかったときには、「どこに行ってたの！」「心配ばかりかけて！」など、批判したり怒ったりすることは止めて「お茶にしましょうか」などと、温かく迎え入れましょう。混乱した気持ちを少しでも解きほぐすことが、前向きな関わり方といえます。

次号では、その他の原因についての関わり方をお知らせします。

（松尾 記）

## ☆ 認知症の種類・・・認知症と紛らわしいもの（うつ病）

**（原因）**60歳以上の高齢者の15%はうつ状態にあるとの研究発表もありますが、高齢になると体の機能が衰えたり、同年輩の仲間の訃報に接することも多くなりますし、これまでの社会的な役割を失う・・・などの変化も、うつ状態になるきっかけとなりやすくなります。

**（症状）**高齢者のうつ病の特徴として、気分が落ち込むという訴えよりも、高齢になると持ちやすい身体的な疾患に強い不安を抱き悲観して、体のあちこちの異常を訴えることが多くなります。

もう一つの特徴が、認知症との関係です。うつであるため、日常生活に出来ないことが増え、認知症と間違われることがあります。認知症による記憶力の低下だと思われていても、検査をしてみると正常で、うつの為に周囲への関心や興味がなくなってきたことによる記憶力の低下といったことも少なくありません。周囲の人は、ご本人の話をよく聞き相談にのり、これまでの経験を生かせることを見つけたりと心の安定に努め、出来ないことが増えてきても、高齢者が大切にされる社会であるよう心がけたいものです。

## ☆ サインを見逃さずに・・・迷わず検診を。

人は年齢を重ねていく中で、五感を始めとして多くの機能が衰えて行きます。認知症の発症もまた、年をとることでリスクが高くなります。この事は誰にでも等しく訪れ避けて通る事はできません。この点はサインを見逃さない上で常に考えておく必要があると思います。つまりサインを見逃さない一番の方法は、**おかしい**と思ったら迷わずに最寄の区の相談窓口である「高齢者相談センター」に相談するか、「物忘れ外来」「認知症外来」「神経科」「神経内科」「老年科」など色々な呼び方はありますが専門医のいる医療機関を訪れる事をお勧めします。

一年半にわたって「サインを見逃さずに」のシリーズを続けてきましたが、取りあえず今回をもってこのシリーズを終了し、次回から新しいシリーズ物をスタートさせたいと考えています。

（福原 記）

『私の忘れもの』は、「福祉のまちづくりパートナーシップ区民活動支援事業」の助成をうけて印刷されています。

お問い合わせは「白い箱の会」事務局（松尾方 TEL:FAX 3998-9006）まで。